新書紹介

図書館の街・浦安（新任館長奮戦記）

竹内紀吉著

未来社　B6判　二二七頁　一、二〇〇円

地下鉄東西線で日本橋から二〇分ばかり、近郊住宅都市として発展しつづける街、千葉県浦安市。ここにあの東京ディズニーランドとならび全国に誇るものがある。それは日本一の公共図書館網の存在である。何を称して「日本一」と言うのか。延床面積か、総蔵書冊数か、総貸出冊数か、否。山高きが故に貴からず。優れた公共図書館とは何か。それは何よりも住民のより多くが利用し、頻繁に利用しそのサービス内容を支持してくれる図書館網である。浦安市は中央図書館開館の翌昭和五十八年度には、年間市民一人当たりの貸出数一〇・八冊を記録し、日野市、北海道置戸町をおさえ一躍全国一に躍り出た（本市は五十九年度で一・三九冊）。貸出登録者率も五二％に達している。この図書館網はいかに作られたか。その創成の姿を内部から記録したのが本書である。

千葉県立図書館で十年以上も司書として勤務してきた著者は昭和五十六年四月、浦安市に新しくできる中央図書館の館長として出向することになる。図書館建設の国庫補助の要件の一つに司書資格を有する専門職館長があり、管理職かつ司書という人材に恵まれない市町村の場合この様な例はままある（県下では湯河原町、葉山町、大磯町、海老名市）。人材なしでは内実の伴った良い図書館ができないという現実の中、かなりの役割を果たしているのだが、著者は見事にその期待に応える。雨漏りがし薄暗い旧図書館の二階に陣取り、二人の職員と共に、著者は精力的に仕事をこなしてゆく。新中央館の設計変更、移動図書館車の更新による図書館サービスの活性化、施設増に伴う人員要求と人材スカウト、図書購入法の改善、電算の導入、住民団体との折衝等々。

かくして昭和五十七年四月、新しくなった移動図書館車「わかくさ」号が運行を開始し、同年五月には堀江分館が、八月には旧図書館を改装した猫実分館が開館し市民が殺到する。翌年三月には待望の中央図書館が開館、開館後二週間で延一五、〇〇〇人以上の市民が延四五、〇〇〇冊以上の本を借りてゆく（特に最初の日曜日には貸出冊数が実に八、七〇〇にも上った）という人口八万強の市としては破格の利用を見るに至る。そして五月富岡分館が開館、ここに中央館、三分館、移動図書館ステーション一〇という図書館網ができ今日に至る。更に一分館を計画中だが、何と一年一カ月（準備もいれると二年）という短期間に日本一の図書館網が現出したのだった。

さて、年間一人当たり一〇冊以上の貸出という活発な住民の利用は何によって可能となったのだろうか。①人口居住地一二万㎢でみれば、図書館施設から大体半径一㎞以内に九五％の人が居住している。②毎年一億円以上の資料費を投入している（市民一人当たりの図書費は、昭和五十八年度で約一、三〇〇円、本市は、昭和六十年度で一〇五円）③それらの条件を活用できる司書をはじめとする人材。

何も奇抜なことをやっているわけではない。貸出に重点をおき、児童へのサービスを重視し、豊富で新鮮な資料がある図書館施設をすべての住民の身近（歩いて一〇分以内）に配置し、全体を有機的に運用する。まさにセオリーを忠実に実行しているだけなのである。だがここまで徹底した例はかつて無かった。

では何がこれを可能にしたのだろうか。まず第一に住宅都市として発展しつつある浦安市の持つ財力、活力であり、文化施設を急速に整備しようとする市の姿勢である。そして何よりも住民の強い図書館要求、それの顕在化したものとしての住民の要望があった。浦安の「こんな図書館がほしい会」は、図書館計画施設研究所長・菅原峻氏（『母親のための図書館』『これからの図書館』（共に晶文社）の著者）を招き学んだ。そして市側は当時浦和市立図書館長だった鈴木四郎氏を招き学んでいる。菅原氏、鈴木氏、共に昭和四十年代からの図書館近代化路線を推進してきた人達であり、前述のセオリーを共有していた。この共通の理念の上に、住民側と市側が共通の図書館ビジョンを持つに至ったのである。そして実務に精通し住民の声に耳を傾ける図書館長の登場。著者の言う「出合い」がいろいろな意味であったと思わざるをえない。住民と行政のビジョンの共有という地方自治の原点の姿がここにはある。

著者はこの本を図書館人よりもむしろ一般の市民にむけて書いたとのことだが、一自治体職員の生きざまとしても興味深い本書、一読をすすめたい。

〈教育委員会事務局磯子図書館　田中公夫〉